

日本の歴史 14

小林恵子著 『聖徳太子の正体：英雄は海を渡ってやってきた』

(文藝春秋 1990年)

稲垣 宏行

聖徳太子は敏達三年(574年)に用明天皇と穴穂部間人皇女いほほのひめみの間に生まれ、推古三十年(622年)に没したというのが通説です。しかし、著者は驚くべきことに聖徳太子が当時、トルコ一帯を勢力下に収めていた騎馬民族突厥出身の達頭という人物であるという説を打ち出しています。そして彼が自ら制定した十七条憲法と隋(中国)の皇帝に宛てた書簡の「日出ずる処の天子、日没する処の天子に書を致す」の文面に、大陸の文化・思想と接点が見られることを証拠として挙げています。そう主張するのも、十七条憲法の中には、仁・義・礼・智・信の五つ全てが含まれており、この五つは元々中国の陰陽五行思想に含まれていたからです。加えてチベットのソンツェン・ガンボ王が制定した、仏教的報恩を主体としている十六清浄人法が十七条憲法の内容に影響を及ぼした可能性も指摘しています。そして、隋の皇帝に宛てた書簡の内容も、前述のように当時の日本人からすれば危険性が強く想像もつかない考え方で、幾度も隋と交戦に及び、しのぎを削りあった突厥以外に考えられないとの趣旨を展開しています。また著者は、達頭という人物が聖徳太子であった根拠として、推古八年(600年)頃、彼が北九州に上陸して斑鳩方面へ移動したという推測を打ち立てています。ちょうどその頃に、日本において大陸から突厥などの渡来人が数多く流入してきたと『八幡愚童訓(源頼範撰)』に記述があったからです。聖徳太子ゆかりの斑鳩寺が建立されたのはその五年後ですが、斑鳩という名称も、拝天教(ゾロアスター教)で祀られている「斑の鳩」と似通っているとするなど、異国文化との関連性も著者は指摘しています。

いずれにせよ、政治的環境から考えれば聖徳太子は天皇になれるだけの才覚を持ち、紛争の解決や統治の面で功績をあげたにも関わらず、生涯一度も天皇の座に就いたことはなく、摂政

の職務を全うした人物であります。入り婿の形で皇宮に入り、天皇の座を手に入れようと画策したが異国の人間であることを理由にそれが成し遂げられなかったからだと著者が述べていることは誠に衝撃的です。

ただし、本書にある説もその時代と当時の人物に対する見方の一つに過ぎません。聖徳太子については多くの異説があり、突厥という騎馬民族がどのように陰陽五行思想を身に付けたか

という経緯など疑問は残ります。しかし、聖徳太子が活躍した時代よりも以前から、日本には隋をはじめ大陸に存在する国々と交流している事実があります。仏教や冠位十二階制度、斑鳩寺に見られる西院伽藍という宗教・制度・建築様式の登場もその産物です。当然、それによって日本の固有の文化も影響を受けて変化を遂げた部分があったと思います。そして、日本の交易相手国であった隋なども、シルクロードを通して他国からの文化が盛んに入り込んでいたことでしょう。また、日本への渡来人の中には中国や朝鮮からだけでなく、著者が言う達頭のように遠くはトルコなど中近東からの来訪者も含まれていた可能性も考えられます。彼らが持ち込んだ物には、その当時の日本文化と大きくかけ離れたものも少なくないと思います。しかし、それは長い間に日本

文化の一部として同化させてしまったのかもしれません。

聖徳太子が大陸からやってきた人間だという説が登場したのも、以上のような文化の移入や当時の人々の交流があってこそ打ち立てられた一つの論理と考えられます。

本書は、聖徳太子という人物についての意外性だけでなく、その背景にある日本とユーラシア大陸の多彩な文化を持った国々との繋がりをも描き出しているのです。

いながき ひろゆき(係・情報サービス課)

聖徳太子渡来説からユーラシア大陸との文化の繋がりを考える